女性に関する教育プログラムの開発に関する基礎的研究
ー高校の教諭による性教育の現状と今後の方向性ー

加城貴美子[1)]，和田佳子[1)]，阿部正子[1)]，高塚麻由[1)]，西方真弓[1)]，高橋初美[2)]，笹野京子[1)]
小林美代子[2)]，関川ミサ子[3)]，高橋由美[3)]，高舘陽子[3)]，中島智子[3)]，村山郁子[4)]，小川雅子[5)]
河端守明[6)]，市村雅子[6)]
1）新潟県立看護大学（母性看護学），2）新潟県立看護短期大学（助産学），3）上越市助産師会
4）日本助産師会新潟県支部支部長，5）上越市農業委員・新潟県農村地域生活アドバイザー
6）上越市こども福祉課

Basic Research on Developing Education Programs Pertaining to Women
:The Present Condition of Sex Education and Future Directivity by High School Teachers

Kimiko Kashiro [1)], Keiko Wada[1)], Masako Abe[1)], Mayu Takatuka[1)], Mayumi Nishikata[1)],
Hatumi Takahashi[2)], Kyouko Sasano[1)], Miyoko Kobayashi[2)], Misako Sekikawa[3)]
Yumi Takahashi[3)], Youko Takadate[3)], Tomoko Nakajima[3)], Ikuko Murayama[4)]
Masako Ogawa[5], Moriaki Kawabata[6)], Masako Ichimura[6)]
1)Niigata College of Nursing(Women's health Nursing), 2)Niigata College of Nursing(Midwifery),
3)Joetsu City Midwives' Association, 4)Niigata chapter president Japanese Midwives' Association,
5)Member of Joetus City Agricultural Commuittee, 6)Children's Welfare Division, Joetsu City

Key words：性教育(sex education)，高校教諭（high school teacher），
教育プログラム（education programs），女性（woman）

要旨

新潟県下の高等学校に勤務する保健体育科教諭，家庭科教諭および養護教諭が行っている性教育の実際とニーズを明らかにすることを目的に調査を行った．結果，回答が得られたのは 119 校中 26 校（21.8%）で，保健体育科教諭 53 名（20 校），家庭科教諭 24 名（17 校），養護教諭 20 名（15 校）であった．平成 15 年度性教育を実施していた保健体育科教諭 21 名，家庭科教諭 19 名と養護教諭 7 名について分析した．実際に性教育を実施している保健体育科教諭が 9 割以上教えている内容は，「エイズについて」，「月経について」，「避妊の方法について」，「男と女の心理や行動の違いについて」，「人工妊娠中絶について」，「性感染症について」であった．家庭科教諭では「生命誕生について」と「月経について」であった．養護教諭では「エイズについて」が 10 割であった．これらのことから，保健体育科教諭と養護教諭では性行動に伴う内容を，家庭科教諭では生命の大切さと身体についての内容を担当し，性教育の内容について教諭により分担されていることが考えられた．性教育に専門家を導入することについて，保健体育科教諭では 7 割以上，家庭科教諭では 8 割，養護教諭では 7 割が必要であると答えていた．依頼したい内容は「生徒がより実感ができるような内容（地域の実態や統計など）」，「妊娠・出産・中絶の実態」等であった．このように専門家には実情に即した正しい情報・知識の提供が求められており，高校の性教育において他職種との連携の必要性を感じていることが推測された．

目的

性教育について研究・調査は，性教育を受けた対象を主体とした研究・調査[1~3]は多い．また学校責任者に対する研究[4]もみられるが，県単位で性教育にたずさわっている保健体育科教諭，家庭科教諭および養護教諭を対象とした調査は比較的少ない．

そこで本研究は，性教育にたずさわっている高等学校（以下：高校と略す）の保健体育科教諭，家庭科教諭および養護教諭に対して，現在実施している性教育の内容と教えたい内容等を調査し，その内容から高校での性教育の実際と今後の方向性を明らかにすることを目的とした．

研究方法

1．対象：新潟県下の高校の保健体育科教諭，家庭科教諭と養護教諭

2．内容：①保健体育科教諭，家庭科教諭，養護教諭－平成15年度の性教育の集団指導・授業の有無，性教育について（対象学年，テーマ，授業科目，教材・視聴覚教材，授業形態，時間等），現在教えている性教育内容，現在性教育に導入できない内容とその理由，教員として抵抗なく性教育ができる内容，今後の性教育で必要とされる内容，性教育に専門家を導入することについて，②保健体育科教諭，家庭科教諭と養護教諭の属性

3．方法：各学校長宛に調査の承諾および性教育に携わる教諭への調査用紙の配布・回収・郵送法による返送の依頼を書面にて行った．各教員については教諭別の調査用紙および研究依頼書を同封し，研究協力の同意を求めた．また回答後，封筒を密封し学校長へ提出することを依頼し，回収を行った．

4．期間：平成16年3月～4月

5．分析方法：平成15年度性教育の集団指導・授業を実施した保健体育科教諭，家庭科教諭，養護教諭毎に半構成的質問内容について記述統計を行った．

6．倫理的配慮：各高校教諭への調査用紙には，研究目的と無記名であり，結果については統計的処理を行い，個人が特定されないことを明示した文章を同封し，研究協力を依頼した．

結果

新潟県内の高校への郵送は119校で，回答が得られたのは26校（21.8%）であった．回答が得られた高校教諭の内訳は保健体育科教諭53名（20校），家庭科教諭24名（17校），養護教諭20名（15校）であった．

1．保健体育科教諭

保健体育科教諭 53 名のうち，平成 15 年度に性教育の集団指導・授業を実施していたのは 21 名（39.6%），実施していなかったのは32名（60.4%）であった．本研究では性教育を実施していた21名についてまとめた．

回答のうち，男性教諭18名（85.7%），女性教諭3名（14.3%）であった．年齢は男性教諭のみの回答17名で，平均38.2歳±14.32歳，範囲は20～59歳であった．教育歴は，男性教諭（n=16）平均16.0年±14.35年，範囲は2～37年であった．女性教諭は1名で30年であった．

1）性教育について

性教育についてTable 1をみると，性教育を実施している学年は2年が多く，次いで1年であった．テーマは，「HIVと性感染症について」が最も多く，次いで「家族計画」，「エイズ」，「思春期と性」であった．講義時間は，1時間～10時間であった．教材・視聴覚教材は「教科書」が最も多く，次いで「ビデオ鑑賞」，「プリント」等であった．授業形態は，講義が中心であった．

2）現在教えている性教育内容

現在，教えている性教育内容はTable 2より，「エイズについて」（95.2%）が最も多く，次いで「月経について」(90.5%)，「避妊の方法について」(90.5%)，「男と女の心理や行動の違いについて」(90.5%)，「人工妊娠中絶について」(90.5%)，「性感染症について」(90.5%)であった．全体に「生理学的側面」と「性行為付随側面」が多かった．

Table 1　保健体育科教諭の性教育の実際　　N=21

項目＼学年	1年 (n=4)		2年 (n=15)		3年 (n=2)	
テーマ	人間らしい生き方	1	思春期と性	3	受精，妊娠，出産	1
	ライフプラン	1	生涯を通じる健康	1	家族計画	1
	エイズ	2	現代社会と健康	1	避妊，妊娠中絶	1
	HIVと性感染症	3	エイズ	4		
	生涯を通じる健康	1	HIVと性感染症	2		
	思春期と健康	1	男女の性機能	3		
	結婚生活と健康	1	性機能の成熟	2		
			妊娠と出産	2		
			家族計画	4		
			性意識と性行動の選択	1		
			結婚と健康	1		
			人工妊娠中絶	2		
性教育時間	1時間	1	3時間	2	5時間	1
	3時間	1	4時間	1		
	7時間	1	5時間	4		
	8時間	1	7時間	3		
			8時間	1		
			10時間	1		
教材・視聴覚教材	教科書	3	教科書	10	教科書	2
	資料（図説等）	3	プリント	4	資料（図説等）	1
	プリント	1	ビデオ鑑賞	10	ビデオ鑑賞	1
	ビデオ鑑賞	2	OHP	1		
	新聞	1	小説	1		
授業形態	講義	3	講義	12	講義	2
			レポート作成	1		

Table 2　現在教えている性教育内容　　n (%)

内容＼教諭		保健体育科教諭 n=21	家庭科教諭 n=19	養護教諭 n=7
生理学的側面	性器のつくり	17 (81.0)	11 (57.9)	2 (28.6)
	初経について	16 (76.2)	3 (15.8)	0 ( )
	月経について	19 (90.5)	17 (89.5)	1 (14.3)
	精通について	16 (76.2)	7 (36.8)	0
	夢精について	16 (76.2)	4 (21.1)	0
	生命誕生について	17 (81.0)	18 (94.7)	1 (14.3)
	第二次性徴について	18 (85.7)	6 (31.6)	2 (28.6)
	身体の発育について	18 (85.7)	5 (26.3)	2 (28.6)
	思春期とはについて	16 (76.2)	4 (21.1)	2 (28.6)
	最近の妊娠・分娩・育児について	16 (76.2)	14 (73.7)	3 (42.9)
性行為付随側面	セックスについて	17 (81.0)	7 (36.8)	4 (57.1)
	避妊の方法について	19 (90.5)	13 (68.4)	4 (57.1)
	エイズについて	20 (95.2)	10 (52.6)	7 (100.0)
	緊急避妊法について	6 (28.6)	2 (10.5)	3 (42.9)
	人工妊娠中絶について	19 (90.5)	17 (89.5)	4 (57.1)
	性感染症について	19 (90.5)	12 (63.2)	5 (71.4)
	エイズ	6 (28.6)	2 (10.5)	0
	クラミジア	7 (33.3)	3 (15.8)	0
	ヘルペス	2 (9.5)	0	0
	梅毒	3 (14.3)	2 (10.5)	0
	淋病	4 (19.0)	2 (10.5)	0
	コンジローム	0	1 (5.3)	0
	エボラ出血熱	1 (4.8)	0	0
	具体的な病気の種類症状	1 (4.8)	1 (5.3)	1 (14.3)
	予防法	3 (14.3)	0	1 (14.3)
	日本・世界の現状について	0	0	1 (14.3)
心理的側面	性欲の処理について	11 (52.4)	2 (10.5)	2 (28.6)
	性に関する相談元について	9 (42.9)	3 (15.8)	1 (14.3)
	男と女の心理や行動の違いについて	19 (90.5)	11 (57.9)	4 (57.1)
	男と女の役割について	13 (61.9)	7 (36.8)	1 (14.3)
	愛とは何かについて	11 (52.4)	4 (21.1)	2 (28.6)
	人生の中での性の意味について	8 (38.1)	5 (26.3)	3 (42.9)
	男の子のからだと思春期の悩み	15 (71.4)	2 (10.5)	1 (14.3)
	女の子のからだと思春期の悩み	15 (71.4)	2 (10.5)	1 (14.3)
	性と生殖にかかわる問題点について	9 (42.9)	7 (36.8)	1 (14.3)

3）現在性教育内容に導入したいが導入できない内容とその理由

現在，性教育内容に導入したいが導入できない内容は「セックス，性欲の処理」で，理由は「生徒の気持ちから考えて，不潔感を感じる生徒もいる」であった.

4）教員として抵抗のある性教育の内容とその理由

教員として抵抗のある性教育の内容は「性欲の処理の仕方」，「コンドームの使用」で，理由は「(反応が）掴みにくい」，「実物を使っての講義は抵抗がある」であった.

5）今後の性教育で必要とされる内容

今後の性教育で必要とされる内容は「性のモラルを身につけさせること」，「家庭での教育」，「各年代に合った教育」等であった.

6）性教育に専門家を導入することについて

性教育に専門家を導入することについて「必要がある」と回答したのは15名，「必要ない」は5名であった．専門家として適任と考える者は，性教育専門家（11名），産婦人科医師（8名），助産師（5名）であった．専門家に依頼したい内容は，「妊娠・出産・中絶の実態」，「性感染症について」，「妊娠・出産からみた生命の尊さ，人間の強さ」，「各分野において，生徒がより実感ができるような内容（地域の実態や統計など)」，「性交について」，「性と生き方について」，「高校生のセックスに関しての警告」等であった.

2．家庭科教諭

家庭科教諭24名のうち，平成15年度に性教育の集団指導・授業を実施していたのは19名(79.2%)，実施していなかったのは5名（20.8%）であった．今回は性教育を実施していた19名についてまとめた.

回答者はすべて女性教諭であった．年齢（n=18）は35.9歳±12.14歳，範囲は24～59歳であった．教育歴（n=17）は平均12.4年±11.93年，範囲は1～37年であった．性教育歴（n=14）は平均9.6年±9.84年，範囲は1～30年であった.

1）性教育について

性教育についてTable 3をみると，性教育を実施している学年は1年が多かった．テーマは，「保育について」が多く，次いで「受精について」，「中絶について」であった．講義時間は，1時間～90時間であった．教材・視聴覚教材は「教科書」が最も多く，次いで「ビデオ鑑賞」，「プリント」等であった．授業形態は，「講義」が多く，次いで「ビデオ鑑賞」，「group work」であった.

2）現在教えている性教育内容

現在，教えている性教育内容はTable 2より，「生命誕生について」(94.7%)が最も多く，次いで「月経について」(89.5%)，「人工妊娠中絶について」(89.5%)，「最近の妊娠・分娩・育児について」(73.7%)，「避妊の方法について」(68.4%)，「性感染症について」(63.2%)，「男と女の心理や行動の違いについて」（57.9%）であった.

3）現在性教育内容に導入したいが導入できない内容とその理由

現在，性教育内容に導入したいが導入できない内容は「愛とは何か」，「青年期の恋愛」，「出産のビデオ」であった．それぞれの理由は「個人の考えの違いがあり，授業でやるのは難しい」，「家庭基礎では内容の削減が行われた」，「かつて，女子のみの時は授業に取り入れていたが，男女ともに授業を受けるようになってからは，男子には受け入れがたいと思われるため取り入れていない」であった.

4）教員として抵抗のある性教育の内容とその理由

教員として抵抗のある性教育の内容は「避妊や性交について」で，理由は「中途半端に興味本位ととられたくない」であった.

5）今後の性教育で必要とされる内容

今後の性教育で必要とされる内容は「正確な情報（データ)」，「生命の尊さ」，「エイズ」，「男性と女性の対等なつきあい」，「情報化社会での潜行する性犯罪に対応する知識と啓蒙」等であった.

6）性教育に専門家を導入することについて

性教育に専門家の導入について「必要がある」と回答したのは12名，「必要ない」は3名であった.

専門家として適任と考える者は，性教育専門家（８名），産婦人科医師（８名），助産師（８名）であった．専門家に依頼したい内容は，「男女の心理や行動の違いについて」，「男女交際について」，「現状と問題点について」，「最近の病気」，「人工妊娠中絶」，「性のあり方・考え方」であった．

Table３　家庭科教諭の性教育の実際　　N=19

項目＼学年	１年（n=10）		２年（n=８）		３年（n=８）	
テーマ	生命の誕生	1	保育	7	出産について	1
	思春期のこころとからだ	1			性について	1
	受精について	2			保育	2
	中絶について	2			乳幼児の心身の成長	1
	出産について	1			育つ，育てる	1
	保育	1				
性教育時間	１時間	4	１時間	1	１時間	1
	２時間	4	５時間	1	２時間	1
	５時間	1	８時間	1	３時間	3
	12時間	1	48時間	1	４時間	1
			90時間	1	20時間	1
			ＮＳ	2		
教材・視聴覚教材	教科書	3	教科書	7	教科書	2
	プリント	2	プリント	4	プリント	1
	視聴覚教材	1	ビデオ	5	ビデオ	1
	ビデオ	4	人体模型	1	視聴覚教材	1
			新聞	1		
授業形態	講義	3	講義	7	講義	2
	ビデオ鑑賞	6	ビデオ鑑賞	3	group work	1
			group work	1		

３．養護教諭

養護教諭20名のうち，平成15年度に性教育の集団指導・授業を実施していたのは７名（35.0%），実施していなかったのは13名（65.0%）であった．今回は性教育を実施していた７名についてまとめた．

回答はすべて女性で，平均年齢(n=7)は44.9歳±11.57歳，範囲は26～55歳であった．教育歴(n=6)は平均19.0年±12.39年，範囲は１～30年であった．性教育歴（n=3）は平均19.0年±14.93年，範囲は２～30年であった．養護教諭で教員の免許を持っているのは２名，養護教諭１種であるが，保健学習で授業担当の発令を受けている養護教諭が１名であった．

１）性教育について

性教育についてTable４をみると，性教育を実施している学年は３年が多く，次いで１年であった．テーマは，「HIVと性感染症」が最も多く，次いで「家族計画」，「思春期の性」，「男女の性機能」であった．講義時間は，30分～４時間10分であった．教材・視聴覚教材は「プリント」が最も多く，次いで「ビデオ鑑賞」，「資料（図説）」等であった．授業形態は，「講義」や「ビデオ鑑賞」であった．養護教諭が授業を行う科目としては「保健体育」が全学年に共通しており，その他としては「総合科目」，「学級活動」等であった．

２）現在教えている性教育内容

現在，教えている性教育内容はTable２より，「エイズについて」（100.0%）が最も多く，次いで「性感染症について」(71.4%)，「セックスについて」（57.1%），「避妊の方法について」(57.1%)，「男と女の心理や行動の違いについて」(57.1%)，「人工妊娠中絶について」(57.1%)，「最近の妊娠・分娩・育児について」(42.9%)，「人生の中での性の意味について」(42.9%)，「緊急避妊法について」(42.9%)であった．

３）現在性教育内容に導入したいが導入できない内容とその理由

現在，性教育内容に導入したいが導入できない内容は「同性間の恋愛結婚」で，理由は「自分の中でタブー視するものをぬぐい去れないから」であった．

4）教員として抵抗のある性教育の内容とその理由

教員として抵抗のある性教育の内容は「性行為をどんな場合もOKとする風潮」で，理由は「年齢制限があると思う．性欲をコントロールする力をつけさせたい」であった．

5）今後の性教育で必要とされる内容

今後の性教育で必要とされる内容は「"産む"選択をする若者を育てること」であった．

6）性教育に専門家を導入することについて

性教育に専門家の導入について「必要がある」と回答したのは5名，「必要ない」は2名であった．専門家として適任と考える者は，性教育専門家（2名），産婦人科医師（3名），助産師（3名）であった．専門家に依頼したい内容は，「性感染症について」，「性と生のかかわり，どう生きるか」，「妊娠・出産」，「人工妊娠中絶について」であった．

Table 4　養護教諭の性教育の実際　　N＝7

項目＼学年	1年（n=2）		2年（n=1）		3年（n=4）	
テーマ	思春期の心身の発達と性についての意識・生き方	1			エイズ・性感染症予防について	4
	妊娠と人工妊娠中絶	1			青年期の愛と性	1
	避妊	1			エイズ感染者からのメッセージに学ぼう	1
	売買春の性と生き方	1				
	エイズと性感染症，予防	2				
	さわやかに青春	1				
	事例について話す	1				
	アンケート調査	1				
性教育時間	30分	1	30分	1	30分	1
	250分	1			100分	2
					150分	1
教材・視聴覚教材	ビデオ	1	プリント	1	教科書	1
	プリント	1	資料（図説）	1	プリント	2
	資料（図説）	1			Power Point	1
	自作教材	1			ビデオ	2
	パソコン	1			視聴覚教材	2
	ゲーム	1			資料（図説）	1
授業形態	講義	3	講義	1	講義	4
	ビデオ鑑賞	1			ビデオ鑑賞	4
授業科目	総合科目	1	体育	1	保健体育	1
	体育	1			学級活動	1
					ロングホームルーム	1
					総合	1

考察

1）性教育の学年とテーマ

学校教育の立場から性教育についての指導内容は井口[5]が提示しているように，教科の体育では「欲求と適応規制」と「家族計画」，保健体育と家庭では「妊娠・出産」，現代社会では「現代に生きる倫理」についての授業である．学級指導の中での性教育は，「性欲と性行動」，「性交」，「出産と育児」，「避妊と人工妊娠中絶」，「性感染症」，「男女の人間関係」と「性と文化・性と社会」である．今回，平成15年度に性教育を実際に実施していた保健体育科教諭，家庭科教諭と養護教諭の計47名の調査結果から検討する．

性教育を実施している学年とテーマは，保健体育科教諭では2年生で「HIVと性感染症」，家庭科教諭では1年生で「保育」，養護教諭では3年生で「HIVと性感染症」が多かった．これは井口が[6]述べているように高校での性教育の指導の基本方針が，「血液による感染防止」と「性行為による感染防止」であることから言えることである．

2）性教育内容

性教育の詳細な内容では，保健体育科教諭が「エイズについて」，「月経について」，「避妊の方法について」，「男と女の心理や行動の違いについて」，「人工妊娠中絶について」，「性感染症について」の内容を9割以上が教えていた．家庭科教諭が，9割以上教えている内容は，「生命誕生について」と「月経について」であった．養護教諭では，「エイズについて」が10割であった．これらのことから，保健体育科教諭は「生理学的側面」，「性行為付随側面」と「心理的側面」の全体にわたっていたが，「心理的側面」の内容にバラツキがみられていたことは，保健体育の中で性教育時間の占める割合が少なく時間的な問題があるのではないかと推測された．家庭科教諭は「生命誕生」と「月経」といった「生理学的側面」についての内容が多いが，「性行為付随側面」や「心理的側面」までも教えていたが，バラツキがみられた．これは家庭科教諭が，一般の高校生への授業と保育を専攻する高校生によるバラツキもあるのではないかと推測された．養護教諭では，「エイズ」，「性感染症」，「避妊」といった「性行為付随側面」や「心理的側面」の内容であり，保健体育科教諭と家庭科教諭との内容に違いがあり，養護教諭のより専門的な内容が話されていたと考えられる．これは平成14年度加城ら[7]の高校生の性教育を受けた内容の調査結果が「生理学的側面」と「性行為付随側面」が「心理的側面」よりも圧倒的に多かった．このことから，高校での性教育の授業が受ける側でも同じ結果であった．

3）現在の性教育内容の導入の困難

導入できない理由については，保健体育科教諭は「セックス，性欲の処理」で「生徒の気持ちを考えて不潔感を感じる生徒もいる」であり，家庭科教諭は「愛とは何か」，「青年期の恋愛」と「出産のビデオ」で「個人の考えの違いがある」，養護教諭は「同性間の恋愛結婚」で「自分の中でタブー視するものをぬぐい去れないから」であった．教諭自身が高校生の個別性の違いがあり難しい，養護教諭は教諭自身の性に対する問題をあげていることは，高校生の成長・発達段階による難しさ，教諭自身の問題をあげていることは，性教育に関わる教諭にとっては大きな問題であると考える．

4）性教育に専門家の導入

多くの教諭が性教育に専門家の導入を考えていたが，なかでも保健体育科教諭と養護教諭は専門家として産婦人科医師と助産師に対して具体的なデータや情報でより現実的な面での話を希望していたのが多かったのに対して，家庭科教諭は性教育の専門家として医療関係者でない専門家をあげており内容は「生理学的側面」や「性行為付随側面」についてよりも「心理的側面」について具体的に高校生に話して欲しい希望であった．加城ら[8]の高校生が性について知りたい知識では，「心理的側面」が多かったことからも，教諭の専門家を導入したい理由と一致している面がみられた．

現在性教育内容に導入したいが導入できない内容は，保健体育科教諭では，「セックス，性欲の処理」，家庭科教諭では「愛とは何か」，「青年期の恋愛」，「出産のビデオ」，養護教諭では「同性間の恋愛結婚」であった．また，今後の性教育で必要とされる内容は，保健体育科教諭では，「性のモラルを身につけさせること」など，家庭科教諭では「正確な情報」，「生命の尊さ」など，養護教諭では「産む選択をする若者を育てること」であった．内野[9]の調査によると，教師に対し，学校の性教育の方針の希望内容としては「純潔教育」よりは「安全なセックスの教育」，「セックスの衝動を理性でコントロールする教育」，「人間・人格教育としての性教育」と応えた者が多かった．このことからも，実際の高校生の性行動および，全人格的な性教育が必要であると考えていると思われた．

5）性教育での抵抗内容

教員として抵抗のある性教育の内容では，保健体育科教諭では「性欲の処理の仕方」，「コンドームの使用」，家庭科教諭では「避妊や性交について」，養護教諭では「性行為をどんな場合もOKとする風潮」であった．内野の調査[9]によると，セックスを想定した安全なセックスに関した性教育をすると子どもたちの性行動をあおるようになるという考え方に教師は4割以上が賛成していたことから，避妊や性交に関する性教育にはいまだ抵抗感があることが，今回の調査からもいえる．

性教育に専門家を導入することについて，保健体育科教諭では7割以上，家庭科教諭では8割，養護教諭では7割の人が必要であると答えている．内野の調査[9]でも，学校での性教育は誰が担当するのが良いかという問いに対して，外部講師を挙げる教師は約半数いたことから，高校の性教育には，

学内だけでは困難さを感じており，他職種との連携が必要であると考えていると思われた.

今回，回答が得られたのは119校中26校で，25%に満たなかった．このことから，性教育に関する調査は難しく，性教育の実際を把握し方向性を明らかにするには，調査方法の検討も含め継続した調査が必要である.

結論

1) 性教育調査119高校へ配布し回答の得られたのは26校（21.8%）であった.
2) 平成15年度性教育を実施していた教諭の回答は，保健体育科教諭21名，家庭科教諭19名と養護教諭7名であった.
3) 性教育は，保健体育科教諭は2年生を主体に，家庭科教諭は1年生から3年生全体に，養護教諭は3年生での授業が多かった.
4) 性教育の内容は，保健体育科教諭は「生理学的側面」，「性行為付随側面」が多いが，「心理的側面」までの全体にわたっていた．家庭科教諭は「生理学的側面」の「生命誕生」や「性行為付随側面」に加え「心理的側面」での内容も多かった．養護教諭は「性行為付随側面」の「避妊法について」が最も多かった.
5) 性教育への専門家の導入については，保健体育科教諭と養護教諭は産婦人科医師と助産師を，家庭科教諭は医療関係者以外の性教育専門家の導入を希望していた.
6) 性教育において実施することに抵抗のある内容は，保健体育科教諭と家庭科教諭は高校生の成長・発達にあった内容にするのが難しい，養護教諭は教諭自身の問題をあげていた.

文献

1) 下村美佳子．山本和代．木村龍雄．女子高校生の男女交際の意識と性・エイズ教育に対する意識に関する研究．教育保健研究　2002；12：91-7.
2) 劒陽子．福岡県の一高等学校における性教育前後での性行動・性意識調査．日本性感染症学会誌 2001;12(1)：91-101.
3) 齋藤益子．木村好秀．高校生の性行動の実態と校長の意識．思春期医学　2000；18(3):257-63.
4) 前掲書3)
5) 井口一成．学校教育の立場から．思春期学　2001;19(2)：146-52.
6) 前掲書5)
7) 加城貴美子．高橋初美．小林美代子．女性に関する教育プログラムの開発に関する研究ー高校生の性教育の知識とニーズー．平成14年度看護研究交流センター事業　活動・研究報告書　2003；57-60.
8) 前掲書　7)
9) 内野英幸．思春期の若者のセクシャル・ヘルスに関する高校生と教師の比較実態調査．公衆衛生情報　2002；5：25-8.